

SAPPORO 教区 NEWS

第28号

2019年1月20日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10Tel. 011-241-2785 / ホームページ : <http://www.csd.or.jp>

クリスマスと 新年のお慶びを申し上げます



第15回世界代表司教会議通常総会 (シノドス)に参加して

司教 勝谷 太治

去る10月に26日間の会期で、第15回世界代表司教会議通常総会（シノドス）が開催され、日本の司教協議会を代表して私が参加してきました。今回のシノドスは若者とともに、若者の持つ喜び、希望、心配、夢、望み、そして広い意味での召命の選択の基

準などを自由に分かち合う場とすることが

たのだと指摘されました。

強調され、その為、世界各国からの青年たちの代表も今回の会議に参加しました。その方法論は青年について語るのではなく、青年に寄り添い、その声に耳を傾けることです。事実、話し合いの土台となる「討議要綱」は、2年の準備をかけ、各国の司教協議会を通しての各国青年のアンケートのみならず、ネットを通して全世界から寄せられた10万の回答と、3月に開催されたブレ・シノドスに参加した世界各国の300名の青年たちの発言を基に作成されたのです。そして、会議に参加した青年たちは投票権はありませんが、自由に意見を述べる事が許され、積極的に発言したのです。議論された課題は数多くあり、およそ現代社会が抱えている問題はそのまま青年に関わるもので、それらすべてについてここで列挙することはできませんが、印象に残ったことをここで述べます。

シノドスはそのはじめから謝罪で始まりました。まず、青年たちへの謝罪です。教会が青年たちに耳を傾けてこなかったことに対してです。青年たちは、多くの困難を抱えながらも人生の指針を求めています。しかし、多くの青年はもはやそれを教会に期待していません。そうなってしまったのは、青年が教会を離れたからではなく、青年の抱える問題に教会が応えようとしていなかったから、つまり教会が青年から離れ

次に児童への性的虐待が大きな話題となり、教会のはっきりとした謝罪と反省、これからの対応について特にこの問題によってつまづきを与えた青年たちに明確に表明すべきとの意見が多数述べられました。また、最近問題が発覚したオーストラリアの司教が全体会議の場で4分間の持ち時間をすべて謝罪に費やした事は印象的でした。この問題については会議の終わりに今後教会は「0（ゼロ）トレランス」つまり、このような犯罪行為に対して、全く容赦しないと言う姿勢を打ち出しました。

次に私の参加した分科会ではじめに多く出た意見は問題を抱えた「結婚と家庭」、「性的マイノリティー」についてです。これは前回のシノドス（テーマは家庭）から引きずっていた問題で、数名の司教たちが、教皇様がこの問題について明確な指針を表明していないことに不満を表しました。しかし、会議が進み今回のシノドスの方法論が理解されるにつれて変化していきました。大切なことは結果ではなく、その過程です。終わりの頃の私たちの合意は「教会はすべてのことに回答を持っているわけではない。今解決できない問題も多くある。しかし、神はすべての人を愛しておられるのだから、教会もそうである。解決できない問題を抱えながらも、彼らに同伴し耳を傾け

続ける事が大切である」ということです。この視点は教会の教えに従って生活していない若者についても同様で、裁くのではなく、彼らに同伴し、耳を傾け続ける事によって彼らを導く姿勢が大切であることが強調されました。倫理的な指針を打ち出すことは簡単です。しかし、それは世界の信者に向かってそれに従うようにと言う呼びかけになり、往々にしてそれに従えない人は教会から排除されてしまうことになっていました。「あるべき指針」を打ち出して、それに従うようにと言う従来の姿勢から、謙虚に耳を傾け同伴し続けるという教会の姿勢が表明されたのです。

この「同伴」する事、「聞く」ことは一貫して強調されてきたことで、今回のシノドスの隠れたテーマであると言えます。これを「シノダリティー」(シノドスの意味はともに歩む)と表現し、これからの教会のあり方の指針となると思われまます。この姿勢をよく表していたのが教皇様自身です。教皇様はとても謙虚に、常に私たちと共にいようと

してくださいました。休憩時間も常に私たちと共にいて、参加者と交わっておられました。そうした姿勢そのものが、今回のシノドス全体を象徴していました。

また、時間をかけて討議されたのはネットの世界とそこに「住む」青年についてです。日本のみならず、欧米の教会にはほとんど若者の姿がありません。けれども小教区を超えたイベント、例えばワールドユースデー(WYD)や各国の国レベルの集まり、教区大会などで青年たちは知り合い、インターネット上でのネットワークを築いています。青年たちは、私たちが把握している小教区という地理的区分けの中に入ってきませんが、それとは違う、言わば見えない「デジタル大陸」の上でつながり合い、活動しています。私たちは既成の概念から離れて、その新大陸にこちらから出向いていかなければならないこと。そうした新しい青年司牧の在り方の必要性が話されました。一方、討議要綱の中に唯一使われていた日本語が「hikikomori」と言う単語です。ネットに潜

む危険性について、そこで傷ついている若者にどうしたら同伴できるかが課題として浮かび上がっています。これについては、日本の教会、そして札幌教区も真剣に考えていく必要があります。札幌教区の小教区には青年たちの姿は見られませんが、1月にパナマで行われるワールド・ユースデーには東京に次いで2番目の人数の青年が札幌教区から参加します。

今回参加した青年たちは気に入った意見に対しては歓声を上げて賛意を表し、分科会でも枢機卿や司教たちの中で臆する事なく、積極的に自由に発言していました。今までのシノドスとはまったく違った雰囲気だったようで、あるシノドス常連の司教は、今回のように楽しいシノドスは初めてだと言っていました。今回のシノドスの形自体が、教会のこれからの在り方(シノダリティー)を示していると感じました。札幌教区においてどのような「シノダリティー」を実現していくかともに模索していきましょう。

教区宣教司牧評議会の動き

勝谷司教から諮問されていた小教区特別積立金(建築・修繕資金)の相互利用を答申

これからの札幌教区共同体のあり方の一つとして、司教の諮問を受けて、およそ2年間、小教区の考えを聞きながらフィードバックを重ねて教区宣司評において検討されてきた。

答申は、提案された小教区特別積立金の相互利用の推進を図ることが良いとした内容。

まずは第一段階として、地区レベルでの相互利用を図り、地区レベルでの対応が困難な場合は、教区に

図っていくのが良いだろうとの内容である。

実施するに当たり、司教が指示し、運用規則を制定・告示することを前提条件としている。

同時に、円滑な推進のため地区の検討機関は地区宣司評が担い、教区の検討機関は顧問会とともに適宜選任された信徒を加え担うことが良いと答申された。

これはあくまで資金調達をどうするかの問題であり、建築や修繕の是非を地区内で検討することではない。建築や修繕の計画承認は、今まで通り司教(教区事務局)への上申が別途必要である。

さらに、今後の問題として、全教会施設の減価償却分を教区として積み立てていく方法を検討することも併せて答申された。

宣教・信仰の
伝達の大切さ

前段の相互利用の答申案が出されて検討し承認されたので、これからは、宣教と信仰の伝達について議論されていくことになるだろう。

司祭、修道者、信徒のそれぞれの立場での宣教や信仰の伝達が大切であることは、参加者全員が認めている。具体的にどのような行動を起こしていくかが課題であろう。

抜粋であるが、次のような意見が出されている。

◎信徒中心の教会と言われているが、その意味するところ(信徒が中心となつて宣教に力を発揮するなど)の共通理解が必要

◎司教と司祭、司祭と信徒など勉強会などを通じてコミュニケーション不足を解消する

◎百周年の際のように、小さなことでも教区一体となつてやることで福音宣教の原動力となる

◎カトリック施設で司祭・修道者・信徒が話をしたり、交流を重ねる

◎情報発信をどのようにしていくか考える

これから、地区宣司評でも検討されていくことと思えますので、信徒の皆さんからも、小教区の宣司評議員を通じて、ご意見をお寄せください。



教区司祭 故使徒ヨハネ 池島亟羽神父納骨式が行われる



北海道胆振東部地震の影響で延期されていた、故使徒ヨハネ・池島亟羽神父（2018年6月20日帰天享年95歳）の納骨式が、10月17日（水）14時より佐藤謙一神父司式によりカトリック白石墓地で行われた。秋も深まり冷たい風が吹く一日となったが、ご親族2名、地主名誉司教他7名の司祭、信徒数名が参列し、61年余りの司祭生活を奉獻された故人を偲び祈りを捧げた。なお、白石墓地では、地震によって碑が倒れる被害が発生したが、災害寄付金によってこの日までに修復を終えている。

「全道司祭大会」開催

6月25日（月）から28日（木）のミサまでの3泊4日で全道司祭大会が北広島クラッセホテルで開催されました。全道から36名の司祭・修道者・司教が集まり、「これからの札幌教区の福音宣教Ⅱ6地区のあり方やフランシスコ会との協働などについてⅡ」というテーマで話し合われました。

初日は司教挨拶と新司教挨拶、そして司教報告が行われました。2日目は9時30分から各地区からの報告と各委員会からの報告があり、午後は2時から外国人司牧とハラスメント対応について難民移住移動者委員会の西千津さんから報告と提起がありました。3日目は将来の札幌教区の共同宣教司牧体制について、2018年現在の司祭の配置の報告を受け、その後5グループに分かれて討議を行いました。午後には全体討議を行い5グループから出された意見や提案を発表し後日まとめて司祭評議会ですることにしました。5グループから出された内容を要約すると次のようになります。

- ・ 地区を越えて教区、宣教会、修道会の宣教司牧
- ・ 信徒、シスター、司祭による共同宣教司牧の試み
- ・ 教区、宣教会、修道会司祭の共生生活
- ・ 教区、宣教会、修道会司祭の各宣教師の勉強会
- ・ 教区立施設（幼稚園、高校）の宣教教育体制の確立
- ・ 外国人司牧

これらの意見や提案を司祭評議会ですり具体的な宣教司牧体制を司教に答申することになります。現在はそれと並行して、フランシスコ会とのこれまでの地区委託契約（旭川、釧路、北見）をやめて、日本管区とあらためて司祭派遣契約を結び、教区司祭も修道司祭も地区の枠を越えて一緒に働くことができるよう話し合いを進めています。4日目は朝食後、カトリック北広島教会に移動してミサが行われて2018年の全道司祭大会は閉会しました。来年の全道司祭大会は、2019年6月25日（火）から27日（木）まで2泊3日で北広島クラッセホテルで開催されます。

「東京教会管区会議」開催

7月18日から19日まで、定山溪万世閣ホテルミリオネーと札幌教区カトリックセンターで「東京教会管区会議」が開催されました。東京教会管区の6つの教区から司教をはじめ、司教総代理、事務局長、副事務局長、教区会計担当などが参加し、それぞれの教区状況を報告し、分かち合いました。今年は東京教区の司教座に着座された菊地功大司教が教区を変わって参加し、さいたま教区の司教に叙階された山野内倫昭司教が新たに加わり参加しました。さいたま教区の教区管理者であった岡田大司教は今回から不参加となります。新潟教区の教区管理者は菊地大司教が兼務しています。今年は通常の会議だけではなく、新しくなったカトリック札幌司教館（札幌教区カトリックセンター）の紹介と見学をしました。この会議は6教区それぞれ持ち回りで開催しています。次回2019年は仙台教区が担当となります。

教区青少年の家が完成

2018年6月29日引渡しが行われ、勝谷司教の祝別を受けて利用が開始されました。青少年の活動をベースに、教区とその関連団体が利用することが出来る。問い合わせと申し込みは教区本部事務局まで。



「青少年の家」を使用することになった

カトリックボーイスカウト札幌26回 吉田 房子
『あ、鐘が鳴った』
10cmほどの高さの舞台、長さ・絵柄の違うカーテンで造られた緞帳等々、カトリック札幌教区『青少年の家』2階はすっかり劇場へと様子を変えています。

待降節の始まった12月2日、私たちカトリックボーイスカウト札幌26回は、ビーバー隊（小学1年）・カブ隊（小学3年）・ペンチ隊（小学6年）・ベンチヤー隊（高校生）が集まりク

リスマス会を開きました。楽器演奏やクイズ大会を楽しみ、劇「クリスマススの鐘」を演じました。ずっと鳴らなかつたクリスマススの鐘を鳴らした素晴らしい贈り物とは、何だったのでしょうか？演じたスカウトたちにも、見てくださった方々にも、感動と共に何かあたたかいものが残ったのではないのでしょうか？

演じることには、想像力・表現力・理解力・たくさんの力が必要です。公演後は1階で昼食会。

恒例のうどんにケーキにお菓子、楽しく食事をして今年の団としての活動を締めくくりました。

ただし、ボーイ・ベンチヤースカウトたちは24日の夜、北一条教会のクリスマスミサに来られる方々をお迎えして駐車場整理やご案内、聖歌隊に交じって聖歌の合唱と続きますが、雪解けの頃から始まった旧スカウトハウス（大小3棟）の取り壊し、新築、7月の暑い頃の引っ越し作業。昨年からの前述のカーテンの

ように代々伝わる大切なものを一つ一つ荷造りし、途方に暮れるほどの数の段ボール箱を運び、研修会や地区行事など数々の活動の合間に整理し青少年の家の活動が始まりました。

中央区に有って、周りに緑があり（聖園こどもの家・北一条教会の庭）、これらを利用できることは大変恵まれた環境です。

「スカウトのちかいとおきて」のもとに集まったいろいろな年代の私たちは、活動を通してより多くの経験をし、各自の技能を高め幸せな社会人になるよう目指しています。もちろん全てにおいて祈りに始まり祈りに終わります。

1月6日のお餅つき大会から再び始まる活動、舎営（宿泊）も交えて今年度の活動は、まだまだたくさんあります。

スカウトたちが、風邪を引く心配もなく（以前はブレハブでした。）舎営で暮らすことにお恵みを感じ、団本部を『青少年の家』に置くことに感謝いたします。

そして、スカウトの人数がもっと増えて、より元気な活動が出来るようになりたいと日々祈っています。

日本カトリック正義と平和全国集会 名古屋大会



11月23日、24日、第40回日本カトリック正義と平和全国集会（カトリック名古屋司教区主催・日本カトリック正義と平和協議会共催）が名古屋布池教会（名古屋教区カテドラル）をメイン会場に開催された。韓国等海外からの参加者も含め全国から約400人が参加、札幌教区からも十数名が参加した。

二日目は、名古屋地区の教会等11の会場で、いのちに関わる社会問題、深刻化する人権問題について、「移住者」「福島原発事故」「東アジア問題」「差別」「LGBT」「性虐待・性暴力」「死刑」「受刑者」「自死自殺」「排除」「沖縄基地問題」「優生思想」「憲法9条」「貧困」「環境破壊」「原発問題」をテーマとする16の分科会が行われ、それぞれが発題に参加者は熱心に耳を傾けた。

派遣ミサでは、二日間の大会の様子を青年達がスクリーンで紹介、映像とナレーションによって他の分科会の内容や様子が生き生きと伝えられ、参加者各々が決意と希望を新たにし大会は閉幕した。

「いのちの危機」にカトリック教会と私たちキリスト者がどう向き合うか、大阪大司教区・アベイヤ補佐司教、ベリス・メルセス宣教師、修道女会・弘田鎮枝修道女の二人が、福音的視点で考察と提言を述べた。



北海道胆振東部地震について（今後の災害時の対応）

9月5日（水）午前3時8分頃に北海道胆振東部地震が発生しました。厚真町では最大震度7を記録、安平町、むかわ町でも震度6強を記録し、土砂崩れや液状化現象が発生し建物の倒壊や道路の寸断、そして多くの命が奪われました。被害にあわれた方々には心からお見舞い申し上げます。札幌教区では被災直後から教会の建物や信徒の被害

状況、カトリック墓地の被害状況を調査し、札幌教区サポーターセンターの協力を仰ぎ、今後の支援について協議しました。札幌教区サポーターセンターは東日本大震災を支援することを目的として発足し、札幌カリタスが活動母体となっており、今後は今回の北海道胆振東部地震のような災害時に第一に対応していく教区の災害サポーターと

して対応していくことが決まりました。

教会から被害の修復のために必要な費用として挙げられている4件について、支援することを決定し送金されました。苦小牧教会の壁の修復で259,200円、静内教会の壁と階段の修復で347,760円、恵庭教会の煙突撤去で43,200円、北広島天使幼稚園の守護の天使と幼児像は修理か製作になりますが、こちらはまだ見積もり中です。

2019年3月22日（金）性虐待被害者のための祈りと償いの日

教皇フランシスコは「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けることを決定し、日本カトリック司教団はその日を四旬節第二金曜日と定め、次のように呼びかけています。「すべてのキリスト者とともに、傷ついた被害者の方々の悲しみと苦しみを理解し、彼らの癒しと回復のために、いつくしみ深い神に祈り、また、全世界の教会がこの困難な状況乗り越えるために、神からの恵みと力づけを祈りましょう。」（2016年12月14日）

第3回目となるこの日、日本の全教会は心を一つに祈りを捧げます。カトリック札幌教区カテドラル（カトリック北一条教会）では勝谷太治司教司式によるミサ（18：30）が捧げられます。詳細についてはカトリック札幌司教区ハラスメント対応デスクより各小教区宛ポスター等ご案内を発送予定です。

また、被災者の手に直接渡る義援金として使ってもらうためにいろいろな方法を模索したところ、北海道共同募金会に1千万円を寄付することとしました。里塚墓地・白石墓地・円山墓地の墓石の被害額と所有者との連絡について、来春雪解け後に札幌市から報告が上がってきますので、教区から支援が必要な時のために1千万円程度を残しておきます。残りの数百万円については追加で支援の要請があった時のために確保しておきます。

被災者と被災地への支援として9月14日付け勝谷司教文書が出され皆様のご協

静内教会献堂60周年を祝う

2018年6月2日(土)勝谷司教の司式で静内教会献堂60周年を祝う式典が執り行われた。小さな共同体であるが、これからも自分たちができる範囲で小教区を守っていこうと心に強く決めている。信徒数は少ないが、とても心強さを感じさせる共同体である。

カトリック神居教会 献堂50周年、小さき兄弟会 旭川フランシスコ修道院 創建50周年を祝う

10月8日(月・祝)11時から星野リゾートOMO7旭川において、カトリック神居教会献堂50周年と小さき兄弟会旭川修道院創建50周年の記念式典が行われました。



(写真は出席した司祭、修道者)

記念ミサでは、小さき兄弟会日本管区の副管区長である桑田拓治神父司式のもと、旭川修道院長の間野正孝神父はじめ19名の司祭の共同司式で執り行われました。続いての祝賀会では、270名を超える参加者ととも50年の宣教司牧と信仰共同体の歩みを振り返り、これからのさらなる発展を願いながらお祝いしました。

力を仰ぎました。被災地全般への支援金はカリタスジャパンから援助されますが、カリタスジャパンでは緊急募金は行わず、現在ある手持ちの資金でまかなうことを決めました。ただし、教会関係施設の修復等はカリタスジャパンの支援対象外であるため、札幌カリタスで支援することとし、修復にかかる費用としておよ

そ一千万円を目標として支援金を募ることにしました。11月27日現在23、443、319円という目標を大幅に上回る支援金を頂きました。皆様のご支援誠にありがとうございました。また、10月末をもって北海道胆振東部地震の被災支援金の募集は終了となっています。

藤女子大聖マリア大聖堂 完成

建学以来、藤女子大学として初めての聖堂が完成しました。9月28日勝谷司教の司式で献堂式が行われた。マリア院のシスター、学園OG、教職員の代表が参加して行われた。

理事長の永田シスターは、大学の近くにお越しの際は、聖堂に立ち寄って、祈りをささげて頂きたい。また、この聖堂で月一回ミ

サを行い学生への宣教活動の礎にしたいと語っていた。(写真は献堂式の様子)



■ 青少年の活動 ■ 2018フィリピンボランティア開催

7月24日(火)から8月3日(金)まで、高校生対象の「フィリピンボランティア」が開催されました。フィリピン・マニラ近郊のバガックという町にあるラ・サール会が経営する学校「ハイメ・ヒラリオ学園」で小

学生から高校生までの子どもたちと交流(下写真)し、ホームステイを体験するプログラムです。参加者は高校生が11名、引率の先生が3名、ラ・サール会のブラザー1名、司祭1名でした。「ハイメ・ヒラリオ学園」に通う生徒の保護者は



ほとんど収入のない漁師と農業従事者です。そのためこの学校に通っている8割の生徒は無償教育を受けています。またマニラでの拠点として利用させていた

だいた「ラ・サールグリーンヒルズ」という学校にも比較裕福な家庭の子どもたちが通っています。この二つの学校を通して貧困と富について目の当たりにし、参加した高校生たちは本当の豊かさとは何なのかを考えさせられたのではないかと思います。

参加した高校生たちの姿は日に日に変わっていきました。フィリピンから帰ってきて彼らに書いてもらった感想文はとても生き生きしています。見たことや聞いたことを受け止めて、自分の頭で考えていることを感じる事ができました。フィリピンボランティアで体験したことが、今後の彼らの成長のための大きなきっかけとなることを願っています。

左写真「アレキサンドリアの聖カタリナ教会(バガック町)での主日のミサ後」



全道青年の集い開催

11月24日から25日までカトリック月寒教会において「全道青年の集い」が行われました。

全道青年の集いは、かつて全道青年会活動の年中行事としてほぼ毎年行われていましたが、札幌教区における青年の減少や全国的青年活動である「ネットワーク・ミーティング」に青年が参加するようになった経緯もあり、ここ数年は開催されない状況が続いていました。全道青年会代表である大町教会の曾根優希さんと岡山教会の山田康平さんの二人の熱意と、マリアの宣教者フランシスコ修道会のシスター和田とシスター本瀬の協力も仰ぎ、佐久間神父指導のもと開催されることとなりました。

テーマは「Come and See」(「来て、見なさい」ヨハネ1・46参照)というキリストの弟子フィリポの言葉を用いました。これはイエスがフィリポを弟子にした後にフィリポがナタナエルと出会い、呼びかけた言葉です。一緒に集まって「教会とは」あるいは「青年とは」というテーマで分



かち合い、青年同士の交流を行うことを目的としています。この集いの中で「青年が教会に望むこと」が話し合われ、最後に教会や札幌教区、勝谷司教に望むことが発表されました。

その発表では具体的かつユニークな青年からの要望が出されました。その要望として「幼児洗礼であつても全く何も教会のことを知らない青年のために、『一から始めるカテキズム講座』をやって欲しい」というものや、「勝谷司教に札幌教区青年のためのテーマソングを作してほしい」というものが出されました。

青年が今何を教会に求めているのか、どのように青年と関わればいいのかについては、教会にとって差し

迫っている課題と言えます。10月に開催されたシノドス（世界代表司教会議）でも「若者、信仰、そして召命の識別」というテーマで全世界の司教が集まり、若者を交えて話し合われています。「全道青年の集い」を終えて気づいたことは、青年が教会に対する興味を失ったわけではなく、彼ら自身も何かを教会に求めているということ。教会が青年にもっと興味を示し、彼らに寄り添う姿勢が必要なのではないかと感じました。「全道青年の集い」で出された青年からの要望は、指導司祭である佐久間神父が責任をもって勝谷司教に届けるという約束をして閉会しました。

「3年前、手稲教会を訪れるベトナム人は2〜3人でした。今では毎週10人程が訪れるようになり、奉納や待者など典礼奉仕にも積極的に加わってくれ、すっかり共同体の一員。間もなく朗読や共同祈願も担当してもらおう予定です。」と運営委員長の阿部包さんは話します。集まるベトナム人は信徒ばかりではなく、彼らが

連れて来る友人も多いという。今年の夏には、手稲教会主催・難民移動移住者委員会後援で「ベトナム人司牧のための交流会」が行われたが、参加したベトナム人約40人のうち、その3割くらいはベトナム人信徒の友人で未信徒だった。技能実習と言っても様々な場所で就労しているため、日常の中で母国の友人達と会う機会がほとんどない彼等にとって、教会は同じ国から来た人々との出会いの場であり、母国語で話せる大切な場になっていると阿部さんは言う。



外国人と共に歩む共同体とは

カトリック手稲教会には、ベトナム語にカタカナでルビを振った「主の祈り」「アヴェ・マリアの祈り」「栄唱」のプリントが置かれている。日本人もベトナム語と一緒に唱えることができるようにとの配慮からだ。

手稲教会の廊下には、色々な人達とのスナップ写真が、名前入りで掲示されている。ベトナム人信徒も日本人信徒も、どの写真も和気あいあいと楽しそう。これなら眺めているうちにみんなの名前が覚えられそう。手稲教会のアットホームな雰囲気がこちらにも伝わって来る。それでも最初は直ぐにうちとけられなかったようだ。それがだんだんと交流が深まるにつれ、彼らの現実と向き合うことになる。



ベトナム人司牧のための交流会・ビンゴで盛り上がる参加者

「6畳一間に2段ベッド等で10人位が生活するのはまだ良い方、昔の飯場のよくな粗末なプレハブ小屋

で、布団もなくストープ1台という環境で20〜30人位で生活する技能実習生もいる。それでも家賃は4〜5万円も払わなければならぬ」と話してくれたのは宣教師長の濱田さん。手稲教会に来るあるベトナム人技能実習生たちの勤務先は水産加工工場、南国の彼女たちの労働現場はマイナス30℃に凍ったたらこの塊を海水で溶かしほぐすという作業の繰り返し。手はあかぎれ、時には凍傷にかかり、寒暖差による蕁麻疹などにも我慢しながら、ひたすら朝から晩まで働く過酷な労働環境だ。そんな過酷な労働で彼女たちが手にする報酬はほんの数万円、家賃を差し引くと手元に残る給料はほんの数万円。食費を切り詰め彼らは本国の家族へ送金している。阿部さん、濱田さんの話を聞きながら、外国人と共に歩むということとは、彼らの現実と向き合い、苦しみを共にし、支え合うということなのだと思えさせられた。

「それぞれの国の言葉でミサに与かることは理想かもしれない。しかし、それでは一つの建物に二つの教会が存在するのと同じこと、共同体とは言えないと思う」と阿部さんは言う。司祭が少なくなり、共同司牧が当たり前になる今後、国籍を超えた信徒共同体の在り方がますます問われる。人は誰でも愛される存在として生まれてきた。「最も貧しい人に寄り添い見守り続けていくことが教会共同体」なのだ。主任司祭の韓（ハン）神父は話す。子どもであれ、高齢者であれ、外国人であれ、苦しい思いをしている人が少しでも癒されること。人生に寄り添うことは互いに豊かになるプロセスであり、それこそが神様が私たちにあたえてくださった恵みなのだ。

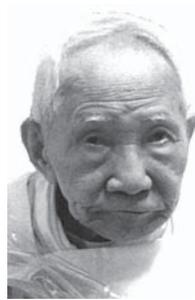
韓神父は今、彼らの信仰の繋がりが、ベトナムに帰国してからもより豊かな実りを結ぶよう、ベトナム人信徒のリーダー養成に思いを巡らしているという。日本カトリック難民移動移住者委員会（J-CARM）とベトナムカトリック教会担当者も連携を深め、彼らのサポートの充実を目指している。現実を乗り越えることばかりにとらわれがちな私たちが、その先を見据え共に現実を歩むことを忘れてはならない。共に歩むということとは、共に明日を描くということでもあるのだから。

描くということでもあるのだから。

訃報

※神様のものとでの安息をお祈りします

▽教区司祭 使徒ヨハネ 池島亟羽神父



月形藤の園で療養中だった池島神父様は6月20日入院先の月形町立病院で老衰のため神様のものと召されました。享年95歳

【略歴】

1923年4月20日 樺太で生まれ、豊原教会で受洗
1956年12月21日 司祭叙階
1957年から山鼻、円山、北一条教会で助任司祭
1962年から千歳、山鼻、三笠、恵庭、千歳の主任司祭を歴任
2004年から恵庭、千歳、北広島の協力司祭
2009年から月形藤の園、ケアハウスなどで静養

2014年から月形藤の園に入所
2017年2月28日 月形町立病院へ入院し加療
2018年6月20日 帰天

▽アルフレッド・バーク神父 (旭ヶ岡のチャブレン)



2017年5月から一年間旭ヶ岡の家チャブレンを務め、横浜に戻られて加療中でしたが6月20日神様のものと召されました。

【略歴】

1930年8月17日 米国シカゴ生まれ
1949年に聖アウグスチノ修道会初誓願
1957年2月9日 司祭叙階
1961年8月に来日し、秦野、磯子、高輪、相模原、二俣川、末吉町、山手、戸塚、原宿、大船教会で助任、主任司祭などを歴任
2017年5月から一年間旭ヶ岡の家チャブレン
2018年6月20日 帰天

■殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会 Sr.Mチエリナ松浦和子



幼稚園での幼児教育に勤めてきて、退職後は重い病気との長い闘病生活でしたが7月11日神様のものと召されました。享年92歳

【略歴】

1926年3月2日生まれ
1950年8月26日 入会
1953年8月11日 初誓願
1958年10月15日 終生誓願

▽Sr.Mアウグスチナ白岩瑛子



青森と月形の老人施設長をおよそ20年間務めた。引退後は札幌マリア院の聖堂係を務め、その後花川マリ

ア院にうつりました。享年93歳

【略歴】

1925年1月16日生まれ
1951年8月25日 入会
1954年8月12日 初誓願
1959年9月24日 終生誓願

▽Sr.Mアデルハイテ尾形伸子



青森、一関の児童養護施設、新田の寄宿舎や青森の保育園などで献身的に奉仕しました。急性心不全のため花川マリア院にて102歳の生涯を終え神様のものと召されました。

【略歴】

1916年3月15日生まれ
1952年8月28日 入会
1955年8月12日 初誓願

▽Sr.Mアウグスチナ白岩瑛子

1960年9月23日 終生誓願
2014年11月22日

新刊図書の紹介

ダイヤモンド祝 2018年8月29日 帰天

■聖ベネディクト女子修道院 Sr.レナータ森治子

入院先の病院で11月24日 神様のものと召されました。修道生活68年

▽Sr.Mアデルハイテ尾形伸子

【略歴】
1923年3月3日生まれ
1950年5月23日 入会
1953年7月11日 初誓願
2018年11月24日 帰天

本書は、教皇フランシスコが在位5年目となる2017年中に行った講話のうち、62編をまとめたものです。教皇フランシスコの講話を一度お読みください。
発行 カトリック中央協議会
価格 本体1,100円(税別)



心と体の癒しを求め、世界中から年に何百万人も人が訪れるカトリックの大巡礼地のルルド。ピレネーの寒村に過ぎなかったこの地で、ある奇跡を体験した少女ベルナデッタの飾り気のない真実の物語です。
発行 ドン・ポスコ社
価格 本体1,500円(税別)



日本カトリック中央協議会、各員会の2018年一年間の活動記録と、司教総会議事録、各委員会の発行物一覧、各教区のデータや教勢調査報告のデータなどがまとめられています。
発行 カトリック中央協議会
価格 本体1,300円(税別)



教区の風

このコーナーは皆様からの思いやお考え等を掲載するコーナーです

主のご降誕おめでとごございます。

改めて、司教協議会列聖推進委員会が作成した「殉教者を想い、ともに祈る週間」改訂版―福者ペトロ岐部司祭と187殉教者の列聖にむけて―の冊子を用いて、八日間一人で祈ってみました。

実に現在のわれわれがどのように宣教していけば良いかの道しるべを見たような気がしました。

それぞれの日にちのテーマは、第一日は、殉教者があかしたものを

第二日のテーマは、殉教者のあかしから生まれる育つ教会共同体

第三日は、あかしする教会によって支えられたキリスト者

第四日は、殉教者を生んだ家庭

第五日は、女性の召命と使命

第六日は、明日の教会を

託される子どもたち
第七日は、羊のために命を捧げた司祭・修道者たち

第八日は、秘跡に生かされる教会です。

各日ごとのテーマに沿った史実を読み、黙想の要点に考え、最後に祈りを唱えます。

第一日目は、信仰の喜びのあかしを考え、それを他の人にどのように伝えれば良いかを考える。まさに自分らしい宣教を考えることになる。

第二日目は、教会共同体の本質を問う内容と思えます。迫害されて弱い立場にいたキリスト者が、より弱い立場の人々に奉仕していたことであり、それは人道的な社会活動だけでなく、み言葉を伝えることだそう

です。現代の私たちに求められている原点がここにあるような気がしました。

第三日目は、司祭不在の共同体の中で、信仰体験が可能な組織を作り運営し、司祭不在でありながらも、

多くの人々を信仰に導いていったことを確認します。それぞれが求められたタレントを生かして宣教してい

きなさいということでしょう

第四日目は、家族での祈りを見直す日となっております。毎日、家族そろって祈るように心がけているか。

毎日、ごもや妻・夫のために真剣に祈る時間を取っているだろうか。問いかけ見つめ直します。家族の中で信仰を伝えていく大切さを考える日となりました。

第五日目は、女性としての立場を通した、授かった子どもたちへの永遠の命について教え信仰を養う使命を考えるとなりました。

女性たちのどのような生き方に共感したか、子どもたちに示した模範のごくに共感したのかを考え、自分の姿を考え導き出してくれました。

第六日目は、殉教した子どもたちが、どのような希望をのうちに信仰のために命を捧げたのかを考え、現代の子どもたちにどのような信仰を伝えていくか、

または伝えていきたらよいかを考える日となりました。

第七日目は、殉教した司祭・修道者を思い起こし、現代に求められる司祭像、修道者像を見て、その姿を

佛とさせる司祭・修道者を考えます。そして、命を懸けて福音宣教と羊である我々のために真剣に打ち込む司祭のため

に真剣に祈ります。

第八日目である最後の日は、自分の信仰生活ではどのような点が秘跡によって豊かにされているか考えます。さらには、聖体の秘跡によって、共同体の絆が強められた体験を考えます。

殉教者の生き方を見て、より具体的に自分の生き方ではどうだろうかを見直すことができるはず

です。最後に八日目の祈りを紹介させていただきます。

いづくしみ深い神よ、あなたのゆるしがなければ、すべてははかなく消えていき、だれも清く生きていきません。殉教者たちを生かしたゆるしの恵みを、わたしたちの教会に味わわせ、その恵みで新たに生かしてください。

また、キリストの十字架と死を記念する聖体を通して、私たちの信仰を育み、あなたのいづくしみを証しする者にして下さい。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン。

これを機にこれからの

編集後記

昨年、自然による想定を超える災害がおきています。そもそも、自然現象を人間の視点で想定すること自体無理で、人間の傲慢な考えだったのかもしれない。今年は、神様のみ旨を考えて日々を過ごしていけるよう自分に戒めています。

かねてから2019年問題としてフランス国会から札幌教区への司祭派遣にかかわる問題が投げかけられてきました。今までは、旭川地区、釧路地区、北見地区はフランス国会に委託されていましたが、フランス国会との話し合いが進められ、それを解除し教区全体で司祭派遣を考える体制へ移行する概略が固まりました。それに伴い、教区司祭も今までフランス国会が担っていたそれら三地区へ派遣され、修道会司祭と一緒に働くこととなります。その具体的内容については、現在検討が重ねられています。札幌教区の運営形態として、開設以来の大変革と言っても良いと思います。

新しい革袋のたとえがありますが、札幌教区も新しい体制に入っていきます。世間も日々変わっていきます。このような世の中で、司教、司祭、修道者、信徒が一つの心になつて、日々、宣教していく方法を考えたいかなければならないと思います。宗教が日常生活に取り入れられていない日本では難しい点が多いとは思いますが、キリストの喜びを皆さんと共に多くの人々に伝えていかなければならないと考えています。

この世に生かされている間は、生かされている今を有意義に生きなければならぬと思います。そして今を生きるためには、主の生き方に倣って生きるにはどうすべきか日々考えて実践していかなければならないと考えています。

日々、自分を見つめて、キリストのみ旨を実践していきたいと思います。

(編集子)